



白薇(黄白薇 1894-1987)の父は日本に留学して辛亥革命に参加した人物だが、古い家長制度を重んじ、娘を強制的に結婚させた。これに抵抗し家を出た白薇は伯父の援助を受け1918年に日本に留学し、お茶の水高等女子師範(現お茶の水女子大)で生物学などを学び、後に文学に転向し執筆活動を開始した。

1926年に帰国したあとは政府機関で日本語の翻訳や大学で日本語教育に携わり、余暇を利用して小説を書き、魯迅に認められ文壇へのデビューを果たした。

詩人の森美千代(金子光晴の妻で白薇とは女子師範時代の級友)がヨーロッパに赴く途中1928年に上海に立ち寄った時、白薇姉妹と会って楽しい時を過ごしたということを自著に書いている。

## 詩人 白薇

1938年、抗日戦争中枢の地武漢で、文芸界が団結して戦うために「文芸界抗敵救亡協会」を成立させた。その会場で五四運動の時代に「幽霊塔」と戦った著者白薇に会った。会う前に『打出幽霊之塔(幽霊塔との戦い)』だけではなく『炸彈輿征鳥(炸裂する弾丸と征服の鳥)』『悲劇生涯』『昨夜』などの戯曲や小説を読んでいた。特に“五四”の精神で書かれた戯『打出幽霊之塔(幽霊塔との戦い)』は私の思想の形成にとっても大きく影響していて、彼女は私が尊敬する革命的女流作家の一人だった。

それで私たちは初対面で意気投合し、昔からの知り合いのように仲の良い友人になった。当時彼女はすでに体を悪くしていて、私と同じように前線に従軍することはできず、後方で抗日戦を宣伝することしかできなかった。この期間に彼女は多くの現代詩を書いた。詩で激しい愛国の情を表現し、詩で日本帝国主義の侵略犯罪に対して怒った。

戦時中は生活が不安定で困窮していたため、彼女の健康状態はずっと良くなかった。記憶している中では日本が投降するまでの八年間、貧しさと病気が彼女から離れることはなかったと記憶している。だが彼女は強靱で、貧しくて病の中にあっても屈することなく、すべての反動勢力に対して、生活に対して、戦いを挑みつづけた。

1946年の春、彼女は重慶から上海に来て、古くからの友人の家に身を寄せていた。食事や宿泊費の問題はなかったが、居候していることに苦痛と不安を感じていた。彼女は困窮していて現代詩を書いてはわずかな原稿料を得ていた。

ある時彼女は病気になって寝こんだが、ながいこと病院に行かなかった。私は彼女が経済的に困っているのを知っていたので、彼女の医療費を支援した。彼女は私に言った。「たとえ落ちぶれて死のうとも、自分を理解してくれない人からの援助は求めない。」こんなふうだったから、どれほど裕福な人であっても、本当に彼女に共感する気持ちを持つことはできなかつたろう。かつて彼女が手紙を寄こして、当時の状況についてこう書いていたことがある。

「私はここの座る前は人がひっきりなしに出入りする客間の一隅にいて、仕事がしにくかった。今はベランダに座ることができている。しかし寄生虫のようにして生きることは私の心を苦しめている。董竹君<sup>①</sup>はとても親切で良くしてくれるが、彼女の家にいる食客たちは私がここに住んでいるのを快く思っていないようだ。私はすぐにも出て行きたいのだけれどお金がないのでどうしようもない。『文匯報<sup>②</sup>』からはまったく原稿料が得られない。あなたの出している雑誌と『文潮』用に短い詩を二首送ります。」

この手紙を読むと一字一涙の感があり非常に痛ましく、彼女の苦況が察せられた。彼女の詩の一首を私は『文潮月刊』渡して発表してもらい、一首は私が主編をしている『神州日報』の文芸欄に発表した。前者は『学術の魂』という題名で、国民党反動派の暗黒政治を呪い、恨みと憤懣を書いている。

敵の真っ黒な魔手が 掌握する大都市  
 一面の暗闇 漆黒の闇が輝きを飲み込む  
 偉大な魂を呑みこみ 消し去ろうとしている  
 汝よ 汝は魂の受難者

魂を物質と引き換えにして 他人が変節しようとする

亡国の民となり 卑賤無恥を受け入れようと  
 汝よ 学問と芸術が侮辱されることを認めるな  
 汝よ 学術を愛せよ 魂を持て！

この詩は白薇が、自分の魂の叫びと尊厳について書いたものだ！

白薇の詩は素朴で自然で、飾られていない。ことばが響き、ある種の力、革命の力が聞く者を感動させる。おそらくこれらの力が彼女の精神を支え、自信につながっているのだろう！彼女は正直で正義感に富んでいる。自己を吹聴することもなく、他人に迎合しおだて上げるようなことをしない。人に接するとき、物事に対処するとき、彼の地位やそれがもたらす利益を考えて行動することはない。基準にしているのは真理だけである。意見の不一致で友人たちと論争するとき、率直で鋭く、相手を適当にあしらうようなことをしない。

①董竹君(1900-1997)……13歳で妓楼に売られ14歳で四川省の副都督(軍政長官)に見初められ結婚し、その後自身の才覚で上海の有名レストラン錦江飯店を作り上げた人物。抗日戦争時は多くの革命の志士を援助した。

②文匯報……新中国(中華人民共和国)支援のためにつくられた香港に拠点を置く中国語新聞。

抗日戦の時に重慶で開催された第一回の「文協」の会場で、どんな問題についてかは記憶が定かではないが、男女が平等に扱われてはいないとして、彼女はすぐに反対意見を出した。彼女は相手が有名人であろうが地位であろうが、まったく気にすることはなかった。あとで私は、あんなふうにはやらないほうがいいと忠告したら、彼女は首を振って言った。「女性を軽視する者はだれであれ尊重はしない。」このため、長い間人々は、彼女が怒りっぽい性格で偏屈な人間だと思っていた。

だが、実はこれは彼女を理解していないから生じた誤解だった。彼女は温和で善良で、ときには子供のように無邪気な人だった。しかし少しばかり世間知らずだった。何ととっても、彼女は詩人だったのだ！

白薇の一生は“感情と愛情”に重きが置かれている。この“感情と愛情”ゆえに多くの苦難に遭った。1947年に父親が亡くなったとき、彼女は千里もの距離をものともせず葬儀に参列するために故郷の湖南に駆けつけた。故郷では二年間、封建制度の害毒をこうむり迫害された。その後母親が病死してやっと、家庭という檻から出て自由になり、自分を解放することができた。すぐに湖南人民解放闘争に参加、全土の解放が成されるまでずっと闘争を続けた。そして1950年、勝利の喜びを胸一杯にして北

京に到着した。北京に着いてすぐ私に手紙を書き、離れていた数年の状況を教えてくれた。

清閣へ： 体の具合は前より少しは良くなりましたか？ ここ数年で移動がありましたか。前と同じところに住んでいますか。あたらしい仕事に就きましたか。それとも、まだ以前と同じように文章を書いて生計を立てているのですか。この手紙が届くことを、返事をくれることを願っています。

私の動きは非常に大きく、1947年に父の葬儀のために帰郷しました。私はふたたび、農村の娘になったのです。ペンを持つ時間はなく、鋤を地面に振り下ろしました。これが我が家の決まりで、母親の厳しい命令だったからです！ 1948年はまるまる一年が受難の年でした。この世の地獄でした。晩年になって気性が変化した母と性格が極悪な地主の姪が私をしっかりとつかみ、奴隷のように働かせました。逃げることを許さず、私は何度か死にそうな目に遭いました。

1949年の春に母が亡くなりました。私にはお金がありません。故郷の中・高等学校で教えながら五百人以上の学生の思想を変え、また密かに遊撃隊の中で活動をしました。去年の夏学校が休みになると遊撃隊に入って公然と活動を開始し、故郷を解放し、ほかの県の解放も助けました。

遊撃隊は6県を解放し、4月、遊撃隊と四野原大軍③が合流し敵湖南を全面的に解放することになりました。私は遊撃隊司令部に入って文芸工作団で働き、同時にいろいろな中・高等学校に出向いて講演し婦人会を組織しました。この時期は、一生のうちで最も多くの人と接触した時期だと言えるでしょう。6県の若者と武装兵士、そして私たちは良い仕事をしました。

遊撃隊は四野大軍に編入されたので、私は長沙に送られて、2か月以上滞在しました。そして北京の中央から長沙宣伝部に電報が来て、私は北京に呼ばれました。文芸界や婦人会のメンバーはほとんどが私のよく知っている友人たちでしたが、みんなは忙しく働いていて、談笑などする時間はありませんでした。

私は文聯(中国文学芸術聯合会)に着きましたが、文聯には住むところがなく、私は病気になるので入院していました。昨日退院してしばらくは貢院西街一号に住むことになりましたが、住むのは不可能だと思われるほど、窓の外をひっきりなしにトラックが走っています。仕事は青年劇院に決まりましたが、そこには部屋がなく、院長の廖承志は私を迎えるには都合が悪いとして、部屋が見つかりしだい連絡するということです。しかし北京は部屋が少なくてまだ住める家の見通しはたっていません。

③四野原大軍(第四野戦軍)……解放戦線時期の中国軍主力部隊の一つ。  
行軍時に各地からの兵士が合流した。

この手紙を読んで私はとてもうれしかった。実のところ白薇との連絡が途絶えてからの数年間、本当に彼女のことを心配していたのだ。彼女がついに逆境に打ち勝ち、解放戦争のために多くの有益な仕事をしたことを知り、ほっと胸をなでおろして無事を喜ばずにはいられなかった。

そのあと彼女は長いあいだ北京に住み、私たちは文通して連絡を取り合っていただけだった。仕事が忙しかったため、何回か北京に行っても彼女に会ったことはなかった。しかしいつも友人に頼んで私からの挨拶を伝えてもらった。聞くところによると彼女は全国政治協商会議委員会の委員となり、党と国家から生活の面倒を見てもらえることになり、30年代以来やっと安定することができ、体のほうは依然としてあまりよくはなかったが、精神的には非常に良い状態にあった。

文化大革命の10年の内乱の時、私は彼女のことが心配だった。彼女の性格を知っているので、四人組の横暴に我慢できず、四人組も彼女を許すことはできないのではないか、と思っていた。

私の推測は間違っただけではなかった。彼女が造反者として罵られ殴られたという知らせが入ってきた。当時、紅衛兵に殴られることは珍しいことではなかった。だが、彼女はそのときすでに古希を迎えた高齢者であり、病弱で殴打には耐えられなかった。

それで私は彼女のことを気にかけていたが、知り合いは各地に移動していて連絡をとる方法がなかった。また、敢えて連絡をとろうという勇気もなかった。一昨年春北京に行ったとき、やっと彼女の住所を聞きだし、訪ねることにした。

彼女は北京東部の郊外、“和平里”にある建物の二階に住んでいた。風の穏やかなある日の朝早く、心の中でいろいろ考えながら道を歩いていた。私たちが離れてすでに31年が過ぎている。彼女はまだ私のことを覚えているだろうか。彼女は病気になって長いあいだ寝ついているという噂を聞いた。ひょっとしたら精神状態がはっきりしていないかもしれない!

私が心配しながら彼女の家に着くと、隣のおばあさんが部屋に案内してくれた。白薇はベッドの上で手紙を見ていた。私は声をかけた。彼女はすぐに頭を上げ、私を見た。意外にも一目で私のことがわかったようで、驚いて歓喜の叫び声を上げた。私た

ちはしっかりと握手して、興奮のあまり涙を流した！ 彼女は杖を握り、苦労しながらベッドから降り、私といっしょに机の前に座った。

机の上に12インチのテレビが置いてあった。見たところ生活状態はそれほど悪くはないようだった。隣人のおばあさんがお茶を出してくれた。白薇はチョコレートを取り出して私にすすめた。そして、「自分は老人になって一人きりだが、少しも孤独ではない。隣人たちがとてもよく面倒を見てくれる、特に彼女の面倒を見てくれる組織もあって、身内よりさらに親しい」と言った。私は彼女の話を受容して聞いた。私自身が隣人のおばあさんの親切に感銘を受けていたからだ。

私が杖をついているのに気づいて、彼女は苦笑しながら私にげんこつを一発くらわせて、ユーモアたっぷりに聞いた。「どうして三本足になっちゃったの？」私はこう答えた。「何のかんの言っても、こうやって生きて会うことができただけで良かったじゃない。」彼女は大きなため息をつき、それから何の気兼ねもない調子で、憤慨しながら“内乱”の時の状況を話した。

ある日 “作家協会” で会議を終えて帰っていたとき、“英雄(紅衛兵を指す)” の一群がバスの中で、自分をゴムマリのように蹴ったり叩いたりした。腰の骨が折れ、その場で気絶してしまった。目が覚めたときにはすでに病院にいた。何というひどい暴行だったことか。それで身体障害となり、今なお自由に体を動かすことができない。

彼女の話を知っているうちにとっても辛い気持ちになり、心の中で考えた。いったい彼女がどんな罪を犯したというのか？

彼女は作家だ。一人の正直で善良な女流作家だ。作品数は多くはないが、彼女が革命期の初期の文学界で忘れることができないほどの貢献をしてきたことは、誰も否定することはできない。だが、法も秩序もない混乱の時代に、誰に向けて理を論じればいいのか？ 私だって殴られ倒れ、蹴られるということを経験したかもしれないではないか。だが、暗闇は結局は過ぎ去ったし、私たちは死ぬことから免れた。それに、彼女は以前のように明るく強く、楽観的で、いささかも意気消沈していない！

その日私たちはとても長く話しこんだ。そろそろお昼になるということになってやっといとまごいをし、彼女に身を入れて療養するようにと忠告し、早く健康を回復しますようにと言った。彼女は名残惜しそうに、よろよろとした足取りで玄関まで出て見送ってくれた。私は何度も振りかえった。外に出ると隣のおばあさんに、彼女のことをよろしく願いますと何度も頼み、彼女の世話をしてくれたことに心からの感謝を述べた。

半年後、第四回全国文代会の作家協会分会で彼女に会った。彼女が出てきたことに驚いた。彼女は杖をつき難儀そうに歩いてきて私の隣の席に座った。そしてにこにこしながら私の手をとって言った。「また会ったわね！」彼女の健康が好転しているのを見て内心とても嬉しかったのだが、「無理をして出てくるべきではなかったのではないか」と口では言った。すると彼女はまったく気にしない様子で、白髪のを振りながら言った。

「これは貴重な文芸界の全国大会なのよ。参加しないわけにはいかないでしょう。」彼女の興奮はその言葉や表情に現れていたが、やはり彼女は自分が病人であることを忘れていた。すぐに具合が悪くなり早目に帰っていった。それ以後、私は彼女には会っていない。

少し前、北京の友人が、彼女の病気が重くなったと伝えてくれた。私は急いで見舞いの手紙を書き、謝冰瑩<sup>④</sup>に彼女によろしくと伝えてくれと伝言したが、返信がなかった。私はずっと心配しているが、ただ黙って、彼女が危険を乗り越え回復し、長寿であってくれるようにと祈ることしかできない。

④謝冰瑩(1906-2000)……中国史上最初の女性兵士となった作家。1931年、1935年の二度にわたって日本に留学している。中華人民共和国が建国される前、1948年に台湾にわたり、台湾師範大学で教鞭を取り、退職後はサンフランシスコで暮らした。

